れんげ国際ボランティア会会報

ARTIC
ASSOCIATION FOR RENGEIN TANJOJI INTERNATIONAL COOPERATION
認定特定非営利活動法人
れんげ国際ボランティア会

みゃうくの風

Vol 72

未来のミャンマーのための平和的抗議

ARTIC
[認定特定非営利活動法人]
れんげ国際
ボランティア会

目次

- contents -

●コロナ禍・クーデター禍でのミャンマー …… 2
ヤンゴン事務所
●さらなる努力を心に期して …… 3
ヤンゴン事務所所長　平野喜幸
●ミャンマー文化紹介 …… 4
●SDGsって何? …… 5
事務局
●チベット難民コロナ禍支援報告 …… 6・7
事務局
●お知らせ …… 8

コロナ禍、クーデター禍でのミャンマーの状況

ARTICヤンゴン事務所

ミャンマーでは新型コロナウイルスの感染拡大に加え、2月にクーデターが起き、社会の混乱が長く続いています。クーデター直後は多くの国民がデモに参加し、民主主義を求めて声を挙げました。また、多くの市民が仕事をボイコットして抗議するCivil Disobedience Movement（CDM＝不服従運動）を繰り広げ、軍製品の不買運動なども行ってきました。さらにはアウンサンスーチー氏を代表とする国民民主連盟（NLD）の議員らで構成される統一政府（NUG）が樹立され、少数民族武装勢力を巻き込んだ国民防衛隊（PDF）が設立されました。9月にはそのNUGから国民全体に、軍に対して全面戦闘を呼びかけるD-dayが宣言され、政情は引き続き不安定であり、地域によっては戦闘が続いている状況です。

一方、ヤンゴンではクーデター以前のように人通りが戻り、表面上だけみれば「日常」に戻ったかのようです。当会ヤンゴン事務所がある、レーダンセンター内のショッピングモールは週末ともなれば込み合っており、向かいの市場も露店も開いており、本当に同じ国で戦闘が起きているのかと信じられないぐらいです。新型コロナウイルスの感染者数はヤンゴンでは7月8月がピークで、現在は地方で感染者数が増加しています。ミャンマー全土において、政情の混乱とコロナ禍により職を失った人も少なくはなく、さらに現地通貨（チャット）の暴落による物価上昇により人々の日々の生活は大変厳しくなってきています。

◆

そんな激動の中でも、イラワジ管区での当会のMilestone Movement in Myanmar事業（学校建設をはじめ、先生たちの研修、農村の開発などを総称した事業名）は日々進んでいます。今年建設予定の学校もほぼ決まり、建築会社と一緒に建設地の測定を行いました。通常、学校を建てる村では村人達が協力して嗜好品を控え、お金を貯め、建設費の4分の1を出資しなければなりません。しかし、今年はコロナ、クーデターといつもにはない社会的な重い負担が発生し、そのため最近になって学校建設を脱落してしまった村が出ました。

そのタイミングに急遽、「学校建設に参加したい」と申し出をしてきた村が現れました。イェージー・タウンシップのスィークワBranch高校です。建設まで後3ヶ月もないこの時期に学校調査に行くのは初めての経験です。通常は年明けの1～2月に調査し、村人がお金を集める期間も普通は約10ヶ月です。ですから、今回は僅か2ヶ月半で35,000,000Kyats（約２００万円）の大金を集められるか不安でもあります。しかし、他の選択肢はないので、行って説明し応援するしかありません。約30人の村人や学校委員会のメンバーが集まり、しっかりとプロジェクトの話を聞いてくれました。また村は予め情報を集めていたようで、学校建設のためには自分達で4分の1のお金を集めなければならないことを知っていました。9月末に50 Lakhs(約30万円)、10月末に１００Lakhs（約60万円）、11月20日に２００Lakhs（約１２０万円）、合計で２００万円超を集める計画を立てていました。ところで、この地域は3つの大きな村に15の集落が有り、世帯数は約５００戸です。村長のU Soe Thein（ウー・ソー・テイン）は61歳、自分の村長人生の最後を学校建設という大仕事に懸けると燃えていました。

◆

ご存知のように、ミャンマーの状況は国全体が困難に陥っています。しかし、村々は自分達がやらなければならない大切な「将来の子ども達の育成や村の発展」のために協力して前進しています。困難な状況を理由に言い訳をし、何もしないのではなく、村人が一致団結して自分達に出来ることを一つ一つやっていく習慣を、他のARTIC家族村にも身に着けて欲しい。そのような小さな努力の積み重ねがこの国の明るい将来を拓いていくと信じています。

スィークワBranch高校

紙芝居を使いプロジェクトの説明

話を聞く村人たち

職員室での打ち合わせ

さらなる努力を心に期して

コロナ感染緊急入院体験記

ヤンゴン所長　平野喜幸

ミャンマーでは6月の下旬からコロナがパンデミック状態となり、その1ヶ月後の7月下旬にはピークを迎え、感染者数は1日6千人を超える勢いとなりました。

そんな中、感染の魔手は当会のスタッフ達にも伸び、殆どの現地人スタッフ、日本人スタッフが感染する事態となりました。

特に平野所長は重症化し、一時危険な状態に陥りました。しかしありがたいことに、スタッフや現地の友人知人達の献身的な努力により回復を果たすことができたのです。

去る7月14日帰宅すると発熱、悪寒、身体全体のだるさによる痛みなどに襲われました。確実にコロナに感染したと分かりました。翌日からは同居している日本人スタッフの鈴木君も同じ症状になりました。さらにARTICヤンゴン事務所の現地人9名のスタッフのうち7名が感染してしまいました。しかし不思議なことに私の場合、味覚嗅覚には何の問題もなく下痢の症状も一度もありませんでした。

7月23日になると少し重症化し、酸素吸入が必要になりました。ありがたいことに建設会社の現地の友人が酸素ボンベを探して持ってきてくれました。

7月26日午後、最初に診察を受けたTokyo Clinicから「血液検査の状況が悪いので、入院できなければ命の危険性がある」と言われました。そこで、在ミャンマーの日本大使館に入院できる病院を探してくれるよう依頼しました。ところが、すぐには見つからず結局28日夜遅くまで待つことになりました。28日の日本人用の現地新聞《ミャンマージャポン》には70、60、50代の邦人男性3名が死亡とのニュースが載っていました。私自身も入院したものの30日までは全く快方の兆しはなく、同日の酸素飽和度は70％にまで落ち、毎日苦しい日が続きました。

◆

私の緊急入院に同行してくれていたスタッフの鈴木君は深刻な状況と判断し、カナダにいる私の家族達に電話を繋いでくれました。携帯の中の家族に会った途端、私は涙が溢れ活きる力が湧いてきました。実は26日にはどうしても遣らなければならない仕事があったために午前中事務所に出て大使館からの最初の入院勧告も断っていました。それはプロジェクトが志半ばということと、職員の家族を路頭に迷わせてはならいという思いからの行動でした。しかし無理がたたって重症化してしまい、多くの方に心配とご迷惑をかけてしまう結果となりました。そして、私自身自分の家族に助けられました。

不思議なもので31日の未明からは一週間ぶりに便通が有り、それまで何も食べることができなかったのですが、赤ちゃんの食べる離乳食のようなメニューでしたが、しっかり食べることができました。

◆

さて、8月4日無事に退院することが出来ました。今回の入院で確信できたことがあります。それは、私の長年のミャンマーでの仕事は間違いではなかったということです。

7月15日から既に3週間以上、生きるために必要な2本の酸素ボンベ、入院中にとても希少な薬（ミャンマーでは患者自身で購入する必要がある）などを、友人たちが私のために毎日探して病院に届けてくれました。3度の食事も全て友人、近所のおばさん、ARTICの職員などが「平野を助けることは自分の責任だ」という感じで献身的に動いて頂きました。ミャンマー人と同様に外国人である私の入院を受け入れてくれた病院は勿論ですが、ミャンマーが私の命を救ってくれたと感じています。

ミャンマーの諺に「慈悲には幅や長さはない、しかし、行ったり来たりしている。」というものがあります。「私がミャンマーの新しい国造りのために捧げてきた人生が、結果的に私を救ってくれた」と感じています。そして、この一年間のコロナ禍で全く進まなかったプロジェクトは、ここにきて視界が大きく開かれ、これから力強く動き出そうとしています。今後も一層プロジェクトに全力で取り組んでいく所存です。

回復し始めた頃の平野所長

Myanmar Nowadays ミャンマーあれこれ

ミャンマーの文化

今回のクーデターに反発するデモの中で、ミャンマーの人々が軍に対する抗議活動の一つとして使ったのが「ロンジー」です。ロンジーとはミャンマーの民族衣装で、ミャンマーでは日常的に着用され、正装としても認められているスカートのような筒状の衣類です。性別を問わず使用されており、男性用のロンジーをパソー、女性用のロンジーをタメインと呼んでいます。パソーはチェック柄が多く、タメインは原色や水玉を使った華やかなものが多いです。生地は木綿でできており、年間を通して暑い日が多いミャンマーでも、ロンジーを着用することで快適に過ごすことができます。

今回のデモで民衆は、道路の両脇にある住居同士をロープで繋いで、そこに女性用のタメインをぶら下げました。これは、その地域への軍の襲撃を防ぐことを目的としています。その効果は、視界が遮られる、連携が難しくなる等の理由もありますが、どうやらそれがメインの理由ではないようです。ミャンマーでは「タメインの下を通ると徳が下がる」と考えられています。これは迷信であり、日本人であれば受け流すようなことなのですが、ミャンマー人にとっては大きな影響があるのです。

というのも、ミャンマー人は占いや迷信といった類を大切にしています。2006年のネピドーへの遷都も占いで決めたと言われており、今回の政変でも、民衆は常に有名な占い師の言葉を信じています。最初は3月18日に何か変化が起こるとのことだったのですが、何も起こりませんでした。次は、3月中にはアウンサンスーチー氏率いる国民民主連盟（National League for Democracy=NLD）が再度政権を奪取して落ち着くという占いだったのですが、これも外れました。つまり当たらないことも多いのです。しかし民衆は変わらず占いを信じており、占い文化は廃れていきません。

考えられるのは、ミャンマーは長年の軍事政権下での厳しい情報統制の影響からか、噂や占い、迷信などを信じる社会となり、根拠のない情報に揺さぶられながら生活をしているように感じられます。

話をロンジーに戻しましょう。デモの現場では、女性用のタメインがぶら下げられている場所を国軍が通行する場合は、わざわざ外しながら前進していきます。「タメインの下を通ると徳が下がる」という迷信の効果は絶大のようです。また、男性が女性用であるタメインに触れることもよしとされていません。そのため、タメインを外すのはもっぱら女性隊員です。伝統衣装であるロンジーを普段から着ているミャンマー人ならではの行動と言えるのではないでしょうか。

現在では国軍からの弾圧が高まったため、大規模なデモンストレーションは行われていません。軍からの暴力的な弾圧から逃れるため、フラッシュモブ型（雑踏の中の歩行者を装って通りすがり、公共の場に集まり前触れなく突如としてパフォーマンスをすること）のデモンストレーションやオンライン上での抗議が続いています。人々の民主主義を求める平和的な抗議活動が、必ずやミャンマーの明るい未来に繋がることを願わずにはいられません。

軍の襲撃を防ぐために街中にぶら下げられた「タメイン」

SDGsとは？

Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の略称で、（エスディージーズ）と呼ばれています。SDGｓは２００１年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）の後継として、２０１５年９月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための２０３０アジェンダ」にて宣言されました。

SDGsは、２０１６年から２０３０年までに、国連加盟国１９３カ国が取り組む持続可能な開発目標で、17のゴール・１６９のターゲットから構成されています。「誰一人取り残さない（leave no one behind）」ことを誓っており、開発途上国だけでなく、先進国も取り組むユニバーサルな世界目標となっています。今日、世界各地で進展がみられますが、２０３０年までにSDGsを達成するには、取り組みのスピードを速め、規模を拡大しなければなりません。２０２０年１月、SDGs達成のための『行動の10年（Decade of Action）』がスタートし、当会も現地パートナー団体や国内外の企業連携を通じて、SDGsの達成を目指す取り組みを、具体的な施策を提案しながら活動を進めています。

当会のSDGsへの取り組み

（SDGs、17あるゴールのうちから、７つのゴールに特に取り組んでいます。）

1. 貧困をなくそう

当会では村人主体の農村開発を通して、主にミャンマーの貧困問題に取り組んでいます。ミャンマーの人口の約四分の一は貧困層であると報告されています。人々が貧困層から抜け出すために、村の組織強化やマイクロファンナンスを用いて人々の収入を創出するための仕組みづくりを支援しています。農村自立のための事業例としては、もみ殻による発電、学校農園、脱穀事業、運搬の請負、小規模の橋を作って通行税を徴収するなどがあります。

3. すべての人に健康と福祉を

ミャンマーやインドでは、噛みたばこが大人の嗜好品として広く普及しており、その健康被害が深刻化しています。九州看護福祉大学と協働で農村の小学校などで口腔保健教育を行い、口腔内炎症・口腔ガン予防に取り組んでいます。また、教師人材育成センターでは、ミャンマー人教員に対して学校保健についての研修も行い、保健衛生を学校のカリキュラムに組み込むように促しています。

4. 質の良い教育をみんなに

当会はより多くの教育の機会をアジアの子ども達に設けるために、これまでにミャンマーで96校、スリランカで4校、タイのミャンマー難民キャンプで4校、学校を建設してきました。現在もミャンマーとインドで建設を行っています。また、ミャンマーでは国レベルでの教育の質向上を目指し、人材育成センターをイラワジ管区に設立し、ミャンマー人教員向けの教員研修を行なっています。この研修に参加した先生方が同僚の先生を対象に研修を行い、草の根の教育水準向上が進められています。

5. ジェンダー平等を実現しよう

ミャンマーやインド、そして国内の活動において当会は事業の計画、事業の実施などすべての段階でジェンダー視点をもち、活動をしています。ミャンマーの農村開発における、村人との交流では必ず女性が参加し、様々な視点からの意見を取り入れています。村人たちの話し合いにおいても、男性だけですべてを決めてしまうのではなく、違う視点や意見を持った女性の積極的な参加を促し、ジェンダー平等に取り組んでいます。

6. 安全な水とトイレを世界中に

インドでは安全で安心な飲み水や生活用水を得ることは易しい事ではありません。特にインド北部の山間部に暮らす、チベット難民は政府の庇護を受けづらい状況にあります。当会はより多くの人が安全な水にアクセスできるべく、水施設の改善・充実を目標とし、上下水道建設、公衆トイレ建設などの活動をしています。

7. エネルギーをみんなにそしてクリーンに

当会はパナソニックと協働し、ミャンマーの無電化地域である農村地にパワーサプライステーション及びソーラーストレージを支援しています。再生可能エネルギーの活用促進と、電化並びに電気を用いた収入創出事業を実施し、継続的な村の自立発展に寄与する活動を行っています。

17. パートナーシップで目標を達成しよう

当会は持続可能な開発のための政策の一貫性を強化すべく、産学官民、市民社会とのパートナーシップを奨励・推進しています。

チベット難民コロナ禍支援報告

コロナ禍で医療品不足
インド居留地のチベット難民を助けたい！

2021年4月インドで新型コロナウイルス感染爆発

日本でも広く報道されたとおり、インドの新型コロナウイルス感染爆発は危機的状況でした。インドでは1日当たりの感染者が40万人を超えて世界最多（当時）となり、医療崩壊が各地で爆発的に起きました。病床はひっ迫し、重症化してもなかなか病院に入れず、感染者は自宅での療養を強いられました。また、火葬場では火葬が追い付かず、さらには遺体を燃やすための木材すら足りなかった状態でした。全土で困難な医療状況が続き、首都のデリーでは1台のベッドを2人の患者が使い、市中では酸素ボンベの強奪が起こるなど、医療が破綻状態となったインドでした。日本人を含む外国人も、感染しても病床不足のため入院はできず、自宅治療をしなければいけませんでした。感染は大都市部から田舎まで急速に拡大しました。

さて、このような緊急時で最も脆弱な立場となるのが、難民の方々です。「難民」とは、政治的な迫害のほか、武力紛争や人権侵害などを逃れるために、国境を越えて他国に庇護を求めた人々のことを指します。

２０２０年の時点で約20万人の難民がインドに暮らしていると報告されています（UHNR.2021）。その約半数を占めるのがチベット難民です（約10万人）。チベット難民とは、１９４９年に中国の侵略とその弾圧を逃れ、インドに亡命した人々で、インド政府の庇護を受けていますが、数十の居留地に分散して居留せねばならず、また、居留地は山間部などの不便な場所に位置することが多く、困難な生活を強いられています。

インド北部のチベット難民居留地からSOS

これまでもお伝えしてきましたように、当会は約25年間インドに在住するチベット難民を支援してきました。チベット文化継承のための書籍出版、老朽化する難民キャンプの家屋修繕、飲料水提供事業などを実施してきました。現在も、居留地において衛生向上の為の事業を行っています。

２０２１年４月末、当会にチベット難民亡命政府から緊急の報告が入りました。「インド国内の新型コロナウイルス感染爆発はチベット難民居留地にも広がっており、難民である私達はインド国内の医療へのアクセスも限られ、サポートも後回しにされ、マスクなどの医療物資も絶対的に足りていない状況です。」

そこで私達は、日本人としてできることをしようと、インドに居留するチベット難民へ医療品を送るプロジェクトを立ち上げました。当時インド国内ではマスクなどの医療品を入手することが困難であり、日本で物資を購入し、チベット難民居留地に輸送することが求められたからです。

一刻も早くチベット難民居留地へ医療品を送ることができるように、当会は早急に入手可能であり、現地で必要度が高い医療品を選択して調達致しました。当会が用意することのできた支援物資は個人用防護用具、プリーツマスク、N95マスク、酸素マスク、ノンリブリーザーマスクの5点でした。

クラウドファンディングに挑戦

さて外国に医療品を送るとなれば、物資を買う資金だけでなく、送料、関税など、大きな金額が必要となります。より多くの医療品を一人でも多くのチベット難民の方々に届けるためには、より多くの皆様の御協力が必要でした。そこで当会では初めてとなる、クラウドファンディング（インターネットによる募金のお願い）に挑戦致しました。初めての試みであったにも関わらず、多くの方々にご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

Shillong(シーロング)居留地

Gangtok(ガントック)居留地

●収　入

①みろくの風会員の皆様からの募金	2,182,900 円
②クラウドファンディング（ネット募金）	1,333,000 円
③れんげ国際ボランティア会緊急支援金	651,564 円
収入総額（①+②+③）	4,167,464 円

●支　出（資金使途内訳）

①医療品（日本調達）	
a. 三段プリーツマスク（20,000 枚）	330,000 円
b. N95 マスク（2,100 枚）	415,800 円
c. 個人用防護服（1050 個）	760,650 円
d. 酸素マスク（250 枚）	96,525 円
e. ノンリブリーザーマスク（200 枚）	117,040 円
	小計 1,720,015 円
②３回の輸送料（各手数料含）	
a. 熊本玉名市からインド	1,118,178 円
③現金寄付（インド国内医療品調達用）	
a. パルスオキシメーター（100 個）	298,000 円
b. 酸素濃縮器（５個）	319,500 円
c. N95 マスク（2000 枚）	230,000 円
d. 電子体温計（120 個）	232,500 円
	小計 1,080,000 円
④クラウドファンド会社の手数料	249,271 円
支出総額（①+②+③+④）	4,167,464 円

Rawangle(ラワングラ)居留地

Sonada(ソナダー)居留地

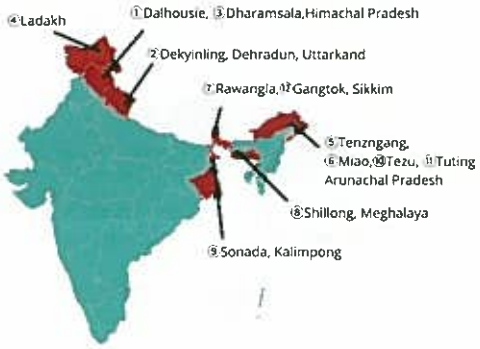
Tuting(トゥティン)居留地

新型コロナウイルス緊急支援医療品配布先

S.No	居留地	受益者	プリーツマスク	N95	PPE	酸素マスク	ノンリブリーザーマスク
1	Dalhousie	424	500	120	30	3	3
2	Dekyiling	3883	1000	300		10	10
3	Dharamsala	6342	5000	570	90	32	32
4	Ladakh	7025	2500	300	140	10	10
5	Tengang	1004	500	120	50	10	10
6	Miao	1561	500	120	50	10	10
7	Rawangla	1215	250	90	30	3	3
8	Shillong	389	250	90	30	3	3
9	Sonada	257	250	90	30	3	3
10	Tezu	950	500	120	50	10	10
11	Tuting	775	250	90	30	3	3
12	Gangtok	2326	500	90	30	3	3
	Total		12000	2100	560	100	100

医療品配布地

以下のインド内のチベット難民居留地に届けました。



謝辞

この度はインド国内に暮らす「チベット難民」へのコロナ禍支援にご協力いただき、心から感謝申し上げます。お陰様で多くの医療物資を現地に届けることができました。ご存じのように、インドは一時、世界的に見てもトップレベルのパンデミック状態になり、最悪時には１日の感染者数40万人、死者数４千人超と桁外れの人々が犠牲となりました。大災害とも言える今回のコロナ禍に翻弄されるチベット難民にとって、皆様からのご支援は一縷の光となることができました。

さて、チベット難民が国を追われ、気候も文化も習慣も違うインドで暮らさなければならなくなってすでに60年が経過しました。当会は約25年間、教育、衛生、伝統文化などの支援を行ってきました。今後もチベット難民が「忘れ去られた難民」となり、世界から孤立し、孤独な民とならぬよう支援を続けてまいりたいと思います。皆様のご理解とご協力を心からお願い申し上げます。

２０２１年９月吉日

れんげ国際ボランティア会

会長　川原英照

募金のお願い

あなたの募金は、支援が必要な人のために使われた後にあなたのもとに戻ってきます!!

例えば…3万円寄付すると最大で14,000円が戻ってきます

当会は厳しい国の審査を受けた「認定NPO法人」です。当会へのご寄付は税金控除の対象となります。
※個人、法人ともに控除のためには確定申告が必要です。詳しいことは最寄りの税務署や税理士さんにご相談ください。

本をプレゼント
（チベット難民）

チベット地方（中国チベット自治区や、青海省、四川省など）からインドに逃れている難民の子供たちにチベット語の物語や小説、副読本などをプレゼント。

10冊で3,000円

机・椅子をプレゼント
（ミャンマー農村）

軍政下のミャンマーにおいても学校建設を進めています。その際の机・椅子の購入費となります。

5セット（5人分）で10,000円

会の維持運営費

各種ボランティア活動を行うためには、現地への旅費交通費、現場との通信費、事務所の維持費（本部や現地）、現地スタッフの給与などが必要となります。このように活動を下支えするための重要な募金が維持会費です。

一口：年間 5,000円

■振込用紙は毎号お入れしています■

これは事務作業の手間を省くためと、「思い立ったときにいつでも振り込みできるように、いつも入れておいて欲しい」という要望があるためです。決して振り込みを強要するものではありません。恐れ入りますが、既にお振り込み頂いた方、ご不要の方はご処分をお願い致します。

第72号　2021（令和3年）10月
季　刊／みろくの風（れんげ国際ボランティア会会報）
発行人／川原英照
住　所／〒865-0065
熊本県玉名市築地2288
電　話／0968（73）4851

◇各種お問い合わせ◇
（認定NPO法人）
れんげ国際ボランティア会
http://renge.asia
e-mail artic@renge.asia　@renge.artic